

腰おれすずめ 福岡県

むかし、ある山里に、おばあさんが住んでいました。

ある日のこと、庭さきに、腰のおれたすずめが落ちてきて、ちゅんちゅん鳴っていました。おばあさんは、かわいそうに思つてすずめをかごの中に入れ、えさをやつてかうことになりました。

かわいがつて世話をしているうちに、すずめは腰もなおつて、かごの中をとびまわるようになりました。ある日、ふとしたひょうしにかごのふたが開いて、すずめはどこかへとんでいつてしましました。おばあさんは、あちこちさがしましたが、どうしても見つかりませんでした。

つぎの日、軒さきにすずめがとんできて、まどの外できれいな声で鳴きました。おばあさんが戸を開けてみると、庭いちめんに、ひょうたんの種たねがちらばつていました。おばあさんは、その種をぜんぶひろいあつめて、裏の畑にまきました。すると、きれいな芽めが出て花がさき、実がなつて、大きなひょうたんがたくさんとれました。おばあさんは、よろこんで、ひょうたんをみんな軒さきの日当たりのよいところにつるしておきました。

十日ほどたつと、ひとつひょうたんから、まつ白いお米がぽろり、ぽろりと落ちてきました。ひとつ拾つて食べてみると、とてもおいしいお米でした。そこで、ひょうたんをぜんぶ下ろしてみたところが、どれにもこれにも、まつ白いお米がいっぱい入つていました。おばさんは、よろこんで、そのお米でごはんをたいて重箱じゅうぱいにつめ、近所の人たちに配つてあるきました。おいしいごはんだつたので、みな大よろこびしました。

ひょうたんのお米は、いくら出しても少しもへらなかつたので、おばあさんは、たいそうなお金持ちになりました。

さて、おばあさんのうちのとなりに、欲ばかりばあさんが住んでいました。欲ばかりばあさんは、すずめの話を聞いてうらやましがつて、すずめをとりにわざわざ山よへでかけていました。そして、一羽のすずめをつかまると、腰をおつて、かごに放りこみました。いつもこうにえさをやらないので、すずめは苦しがつてばたばたとびまわりました。ばあさんは、すぐにかこのふたを開けました。すずめは、どこかへとんでいつてしまいました。

つぎの日、ばあさんが、

みやげ

(すずめのやつ、どんなお土産を持つてくるかなあ)と思ひながら待つてゐると、すずめがとんできてまどの外で鳴きました。戸を開けると、庭いちめんに、ひょうたんの種がちらばつていました。ばあさんは、おおよろこびで、種をぜんぶ裏の畑にまきました。すると、やつぱり、芽が出て花が咲いて実がなつて、たくさんひょうたんができました。

欲ばかりばあさんは、ひょうたんをみんな軒さきにつるして、

(米早くできよ。米早くできよ)と思つて、毎日ながめていました。けれども、いつまでたつても、お米はこぼれ落ちません。ばあさんは、はらを立てて、ひょうたんをせんぶ引つぱりおろし、ひとつひとつうちこわしました。すると中から、へびやら、むかでやら、はちやらが、うようよ出てきて、ばあさんをかんだりさしたりしました。欲ばかりばあさんはどうとう死んでしまいましたと。

おしまい。

原話・『全国昔話資料集成 11. 福岡昔話集』福岡県教育会編  
再話・村上郁